終わりの日

En

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
終わりの日

【Ｎコード】
Ｎ９６３０Ｚ

【作者名】
Ｅｎ

【あらすじ】
キスと
カウントダウンと
願い事の話

「みんな？おいしい？」
Ｘが友人と妹のＹに問う。
本来、この場は平凡な光景である筈だ。
だが、その友人が小人である事（実際はＸとＹが巨人であるのだが）が異常な世界を作り出す。
「おいしいです…お姉さま…。お友達と年越し蕎麦を食べる日が私にも来るなんて…」
Ｙが幸せそうに答えた。
机の上の小人の一人である公平も答えた。
「確かに美味いな。けどこれは…蕎麦？」
「そうだよ。蕎麦粉を一から打って作ったんだからね」
Ｘたちの食べる物は、可能であれば、殆どが彼女たちのサイズに合わせられる。
当然それは公平たちには巨大な物となるのだ。
「俺のこれは麺一本しかないぞ」
神田が文句を言う。
「あ、違うよ。みんなのはそれでも半分だから」
「０．５本とか…」
「だってそれで十分でしょ？」
「これは蕎麦であって蕎麦でないぞ！」
桑野が叫んだ。
「俺はこれでも良いですけど」
「俺も。美味いし」
橘と木之本が答えた。
二人とも巨大蕎麦を美味そうに食べる。
「そうそう。文句言わない！僕らなんか天ぷらがかき揚げしか無いんだぞ！」

「けど天ぷらあるじゃん」
海老や烏賊や芋の天ぷらがそこにはある。
しかしそれらはXたちが食べるにはあまりに小さい。
「全部食べていいならもらうけど？」
Xが意地悪く言う。
「止めろ！まだ少ししか食べてないんだぞ！」
神田が叫んだ。
「そうですよ…お姉さま…。私もまだ食べてません…」
「Yが食べても駄目なんだよ！」
木之本がYを制止した。
「あぅ…」
「この天ぷらも美味いですね」
「これもXが作ったの？」
「そんなわけないじゃん。作ったのは小夜子ちゃん」
「小夜子か！」
「本当に…美味しいですか？」
小夜子が心配そうに言った。
「美味いっ！」
木之本が指を立てて言った。
「ふ…。悪くない」
「え…」
小夜子は桑野の答えに困惑した。
「美味しいなら素直に美味しいって言えよ」
Xが桑野に注意した。
「黙れファルコォ！」
桑野はクワガタ怪人に変身してXにキックをしようとする。
「あーうるさい。うるさい」
Xは右手で桑野を軽く払う。
「く…。今日はこれくらいにしてやる」
「はいはい。年末ぐらい静かにして欲しいよ…」

「でも静かにしてるのもつまらないね」
それからすぐにXが言った。
器の中の麺を退屈そうにかき混ぜる。
公平は何か嫌な予感を感じていた。
だが、今は黙っていた。
XもYも耳がいい。
ここで下手な事を言えば、Xの暇つぶしの玩具にされる。
しかし、残念ながら彼の悪い予感は当たってしまうこととなる。

「…そうだ」
Xが何かに思いついたようだ。
自分の部屋に行って、戻ってきた。
「はい、Y。これ飲んで」
XはYに錠剤を手渡した。
「これは…何ですか…？」
「いいから飲んでっ」
Xは楽しそうに言う。
「はい…」
Yも仕方なく薬を飲んだ。
「ねぇY？僕のお蕎麦美味しい？」
「はい…。美味しい…です」
「そう！？じゃあもっと美味しくなる方法を教えてあげる！」
いいながらXは公平を摘み上げた。
「あぁ、やっぱり」
「覚悟はしてたみたいだね。じゃあ何してもいいよね」

「いや、そのりくつはおかしい」
公平を助けるため、神田が反論した。
「何か言った…？別に神田でも良いんだけど？」
「神田！助けてくれ！」
Xは人を殺したりはしない
そして、神田はかつて公平に裏切られたことを思い出した。
彼の心の中の天秤が傾いた。
「何でもないです。そんな奴どうぞご自由に」
「よろしい」「貴様ァ！」
二人は同時に声を出す。

「公平をお蕎麦に入れて…」
（何だ…箸で追いかけ回されたり、口の中に入れられる程度か…）
「公平ごとお蕎麦を口に入れて…」
（俺は噛まないようにして…）
「公平は噛まないようにして…」
（蕎麦だけ飲み込む）
「公平ごと飲み込む」ゴクリ
（…えー！）

「うわぁぁぁ！」
「公平が喰われたぁ！」
「人殺し！この人殺し！」
「ふぅ…美味しかったよ…公平」
Xがお腹をさすりながら言う。
「公平ー！今助けるぞ！クワッガー…」

「だからうるさいって」
桑野はまたXに払われた。
今回はさっきより強めだ。
結局彼はまた気絶した。
「酷い…お姉さま…！」
「Yもやってみなよ。幸い小人なら沢山いるんだし」
「…！」

「そんな…お兄ちゃんが…私も…」
そして小夜子は泣き始めてしまった。
「ふふ…そんな顔しないで…食べたくなるじゃん」
「みんなは…私が守る…」
「俺が…俺があいつを見捨てたからだ…」
神田は膝を落とした。
「俺にも責任はある…。くそ…」
「公平さん…すみません…」
木之本と橘もつらそうに言う。
「公平…すまな『リリリリリッ』
公平からの電話だ。
「…ふふっ。出てあげたらぁ？悲鳴しか聞こえないかもしれないけど」
「くそ…」
「神田…？どうするんだ？」
「出るさ…。あいつに…謝らないと…」
「…」
YはXを睨んでいる。
Xはそれを笑いながら見つめる。
「もしもし？」

『…神田か？』
「公平…！すまない…すまな…あれ？」
「…神田？どうした？」
「いや…」
神田はデジャヴを感じていた。
Xの方を見る。
彼女は精一杯、笑いを堪えている。
「…まさか！おい！公平！」
『あ、気づいた？』
「気づいた？じゃねぇよ！これは…」
「アハハハ！」
Xはとうとう堪えきれず笑い出す。
Yが不思議そうな顔をした。
「あれ…？お姉さまは一体…？」
「神田？何に気づいたんだよ？」
「何に、って…」
「『ドッキリ大成功ー！』」
電話の向こうの公平の声とXの声が重なる。

『いや、中にカプセルがあってさ。不溶性で開けろ、って書いてある奴。その中に『ドッキリでしたっ』って書いてある紙が入っててさ』
Xは事前に人を溶かさないようにする薬を飲んでいたのだ。
「みんな、面白い顔だったよ、ふふっ、ハハハ！」
Xはまた笑い出す。
『おい！神田！そろそろ出すように言ってくれよ！』
「何で俺が！」
『そもそもお前が俺を裏切ったせいだろ』

公平は嫌みったらしく言った。
デジャヴの原因はこれだ。
前回のドッキリと状況が似通いすぎていたのだ。
「くそ…。X、そろそろそいつ出して…」
「やだ」
「『え？』」
また、電話の向こうとこっちの声が重なる。
Xは神田の電話を器用に取り上げて公平に言う。
「自分で登ってきてよ」
『嫌だよ！』
「嫌ならずっと僕のお腹の中だね。いや、違った。その薬の効果はそんなに長く続かないから早く出てこないと消化されちゃうよ」
『』
「じゃあねぇ」
電話は一方的に切られた。
公平は諦めて登ることにする。

「年越しのカウントダウンまであと三時間か…それまでに帰ってきてね。…さてY？」
「何でしょうか…」
Yは安心したような、怒ったような顔をする。
「さっき飲んだ薬…覚えてる？」
「薬…？はい…覚えてます…」
「…まさか」
神田が呟いた。
Xはそれを聞き逃さなかった。
「神田鋭いね。そ、さっきYが飲んだの薬は人の体を溶かさないようにする薬…。後は…分かるよね」
Xは神田を摘み上げた。

「え…？」
「止めろよ！」
「大丈夫！すぐには消化されないから！ハイ、Y。神田を食べて？」
「…嫌…可哀想…」
「別に僕が食べても良いんだけど…。ねぇY？それで公平に当たったらどうする？」
「う…」
「どうせ食べられるのは決まってるんだし公平の為にも、ね？」
「…分かりました」
「俺にも何か意見を言わせろよ！」
「嫌なの？」
「嫌だよ！」
「けどみんなもだよ？」
「う…」
「公平を裏切ったわけだし、君もさ」
「…あー分かったよ！これで他の誰かを妹ちゃんに食べさせたらあいつに悪いしな！」
「ハイ！決定！一応言っとくけど吐き出すのは無し！」
「…はい」
「いや、そんな素直に従わなくても」
言い切る前にYは神田を口に入れて、そのまま飲み込んだ。

「楽しかった！じゃあ僕もう寝るね！小夜子ちゃんは悪いんだけどYと寝てくれないかな？」
「うん…」
「じゃ！お休み～！」
そうしてXは自室に戻ってしまった。
「俺たちはどうします？」

「もう帰ろうぜ。Yちゃん。悪いけど俺たちを外に出してくんないかな」
「はい…」

そして、木之本と橘、そして桑野は帰ってしまった。
「…やること無いしもう寝よっか」
「…はい…」
結局小夜子とYも、もう寝ることにした。

「あーん」
Xは公平がいつ戻ってきても良いように口を開けていた。
「…プハァ！」
Xが公平を口から出す。
「お帰りー」
「…お前な…」
彼はようやく帰還した。
「あー疲れた…」
Xが公平を、指先で布団に押しつけた。
「ちょっ、止め…」
「ねぇ？」
「だから…」
「僕ね。今年公平に会えて良かったと思ってる」
「…」
Xがいつもは言わないことを言う。
「今年は凄く楽しかったし」
言葉を続ける度に押しつけられる力も増す。

「その…僕と会ってくれて、本当にありがとう」
公平は今のXのこれは照れ隠しだと気づいた。
「…どういたしまして」
今回は文句も言わないでおこう
Xが恐いからじゃなく、公平も照れくさかったからだ。

一方、神田も公平の二十分後に脱出した。
「…やっと出れた…うわ！」
Yは神田を口から出すと、そのまま抱きしめた。
「良かった…。良かった…」
「妹ちゃん！苦しい！苦しいから！」
「あらら…」
小夜子が苦笑しながらその様子を見ている。

「ごめんね…」
Xは少しやりすぎたと反省した。
公平は既に体中ボロボロだった。
「いや…。いいよ…。一緒にカウントダウンするんだろ？これくらい全身痛けりゃどんなに疲れてても寝れないしちょうどいい」
「…今治すね」
「何か事情があるんじゃ…」
「大した事じゃないよ。ただの我が侭なんだ」
「我が侭…？」
「だって、相手を舐めるなんて…恥ずかしくて…」
「確かに」
冷静に考えればYが特別恥ずかしがらないだけだ。

Xはむしろ普通だ。
「でしょ？」
「じゃあ無理しなくていいよ。明日起きたときにまだ治ってなかったら病院行くから」
「僕ね…この能力を知った時に本当に大好きな、一番大切な人にしか使わないって決めたんだ。…だからさ」
ドキドキする。
Xも、公平も。
二人ともこんな事は初めてだ。
Xの舌が、公平に近づく。

「苦しい…」
「絶対…離さない…」
神田はYの胸の谷間にしまわれていた。
「妹ちゃん…苦しいから…」
「…少し寝ます。カウントダウンには…起こして下さい…」
Yはそのまま寝てしまった。
腕を組んでいるのか、殆ど動けない。
「どうするんだよ…」デレレレデレレレ
神田の携帯にメールが届いた。
小夜子からだった。
〈いい加減『妹ちゃん』って呼び方止めて、名前で呼んであげたらどうですか？〉
「…」
今、Yを「妹ちゃん」と呼んでいるのは彼だけだった。
「俺の勝手じゃないか…『何で？』と。送信」
返事はすぐに帰ってきた。
〈Yちゃん気にしてますよ。それに…神田さん、彼女のこと…〉

神田はこれ以上読めなかった。
「何で…」
返信も出来ずにいると、小夜子から電話が来た。
「何？」
『返信くださいよ。Ｙちゃんの事、本当はどう思ってるんですか？』
「…」
『言わなくてもお兄ちゃんと桑野くんとＹちゃん以外はみんな気づいてますよ。』
「え…？」
『恥ずかしくて名前で呼べないなんて、見てるこっちが恥ずかしくて』
「え！？いつからバレてたの」
これだと、Ｙへの思いを告白してるのと変わらない、そういうことにも気づけぬ程に神田は動揺していた。
『Ｙちゃんが来てすぐです』
「…マジっすか…」
『マジっす。それで、いつ告白するんですか？』
「…いやまだ…」
『…じゃあ、いつ名前で呼んであげるんですか？すぐの方がいいですよ？さっきも言ったけどＹちゃん気にしてますよ』
「…うん」
彼自身、Ｙへの気持ちに気づいていた。
だが、それと同時に自分とＹの物理的な差も感じるのだ。
そして、自分とＹは住む世界が違う、と勝手に考えて、納得しているのだ。

「…やっぱりこれはずかしひね」
「…うん」

公平の体はXの唾で濡れていた。
体の痛みは殆ど消えたし、彼女もそれに気づいている。
だけど、Xは舐めるのを止めないし、公平も止めない。
「…はずかしひけど、なんかしあわへだな」
「俺も。幸せだよ」
「…えへへ」
「…なあX？」
公平の問いかけにXは彼を舐めるのを中断した。
「ん…。何？」
「何で俺なんだ？」
ずっと、思っていた事だ。
公平は決して顔がいいわけでも無いし、友だちを見捨てたりもする男だ。
対して、Xは体は大きいが、美人で料理上手で少し悪戯好きだが優しい女の子だ。
公平は、自分とXが釣り合っているとは思えなかった。
ましてや、彼女の『本当に大好きな、一番大切な人』に相応しいとは。
「…さあ？」
「え？」
「少なくとも初めは何となく、一緒にいたら楽しめそうだな、って思ったからだよ」
「えー…」
「けど勘違いしないで…僕は『君』を好きになったんだ。良いところも悪いところもみんな含めてね。それが、他の誰でもない『公平』って人でしょ？」
「…」
「僕は間違ってない。だって僕が正しいと思ったんだから」
懐かしい台詞が、公平の言葉が、今帰ってきた。

「俺と彼女は住む世界が違う、それだけだよ」
『はあ！？』
小夜子らしくない返しだったので驚いた。
「…悪いかよ！俺は間違ってない…これで良いんだよ」
『じゃあ、Yちゃんと同じ大きさの男の人がYちゃんを攫っていけば良いって言うんですか？』
「…そうだよ」
神田は少しイライラした。
何で年下の女にこんな事を言われているのか分からない。
『アホらし。真面目にアドバイスして損した』
神田はキレた。
もう我慢の限界だ。
「さっきから何なんだよ！お前は！」
『あんたが男らしくない情けないことグチグチ言ってるからでしょ！！』
神田は小夜子の声にたじろいだ。
『住む世界が違う！？なら自分で世界を変えろよ！お前は兄貴たちの事も、今までの時間も全部否定すんのかよ！』
「あ…」
その通りだ。
自分とYの事を否定することは同時に公平とXの事も否定する事になる。
『結局、お前は振られるのが恐くて、『自分の気持ち』が世界に否定されるのが恐くて逃げてるだけじゃねえか！』
その通りだ。
振られるのが、『今』が変わるのが恐い。
『今』のまま、『神田』と『妹ちゃん』のままでいたらどれだけ楽だろう。

そして、どれだけ苦しいだろう。
「そう…だな。ありがとう…やっと、決心ついた」
『急がなくて良いですよ。ただ、前に進んで下さい』
その、小夜子の変わりように苦笑する。
『わ…笑うなぁ！』
「悪い悪い。そうだな。前進しねぇと。取り敢えず、ちゃんと名前で呼べるようになる！」
『…頑張って下さい。そろそろ年が明けますね。Yちゃんを起こしましょうか』

「もうすぐ年が変わるよ」
「うん。Xと出会った年も、もうすぐ終わる」
「寂しいなぁ…」
「寂しいもんか…。まだ時間は作れるんだ」
「うん」

「もうすぐですね…。お願い事は考えてますか…？」
Yは神田を胸から取り出して言った。
「お願い事？」
「はい…。カウントダウンに来年のお願い事をすると…それが叶うんです…」
「流れ星じゃないんだから…。けど、それも面白いかもな」
「そうですね。うん。私もお願いしよっと」

「神田の奴、どうなったかな」
木之本は、XがYに神田を食べさせた辺りで、その意図に気がついていた。
最初から神田とYの仲を縮めるつもりだったのだろう。
「俺だって…本当は…」
そこからは口にしない。
まだ、負けてないから。
「神田ぁー！俺も負けねぇぞぉー！」
その声は、確かに世界に響いた。

「今年は色々有ったな…」
橘は桑野に電話をかけていた。
『そうだな…。おっと、そろそろカウントダウンか…。お前は何を願うんだ？』
「願う…？」
『知らんのか？カウントダウンをしながら願い事をするとな、それが叶うのだ』
「へー聞いたことないな…。やってみるかな…」
『…！始まるぞ！』
「…よーし！」

―スリー！
―ツー！
―ワン！

「お願いできた？…Y」
「…！」
「…どうした？」
「今叶いました…」

「…まさか、年越しの瞬間にキスが来るとは…」
「いいだろ！今年…いや、去年の最後だったんだし！」
「うん。そうだな…。なあX」
「何？」
「去年より…良いお年を」
「へへ…ありがと。公平も去年より良いお年を！」

終わり

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9630z/

終わりの日

2011年12月30日00時47分発行